

みずな栽培指針

月旬	1 上中下	2 上中下	3 上中下	4 上中下	5 上中下	6 上中下	7 上中下	8 上中下	9 上中下	10 上中下	11 上中下	12 上中下	収 A	穫 品	目 率	標 :	3 0 0	箱 上								
栽培体系													株間：7cm 条間：15cm (シーダーテープ利用の場合、一粒入れとする。冬場など、大株になる場合は、株間5cmにする方法もある。)													
	生育後半遮光資材使用 (遮光率40~50%遮光) 生育目安25日、30日、35日、60日~70日、70日~90日 ベタガケ、トンネル、内張り二重カーテン使用。生育後半とう立注意												生育適温：10~23 (低温や乾燥には比較的強いが、過湿には弱い。特に高温期の過湿には弱い。)													
病害虫	立枯病、根こぶ病、軟腐病、コナガ、ヨトウムシ、キスジノミハムシ、アオムシ、アブラムシなど												【施肥例】 10a当たり <table border="1"> <tr> <th>肥料名</th> <th>現物量</th> </tr> <tr> <td>有機アンドエイト</td> <td>100kg</td> </tr> <tr> <td>BMようりん</td> <td>40kg</td> </tr> <tr> <td>卵殻エース</td> <td>60kg</td> </tr> </table> 堆肥は2~3作分をまとめて、完熟な物2~3トン/10a投入する。 肥料投入前に、土壌のPH・ECを測定し、施肥量を定める。						肥料名	現物量	有機アンドエイト	100kg	BMようりん	40kg	卵殻エース	60kg
肥料名	現物量																									
有機アンドエイト	100kg																									
BMようりん	40kg																									
卵殻エース	60kg																									

<みず菜の特性>
 アブラナ科で、冷涼な気候を好む。
 花芽分化は発芽後5 以下の温度で15~20日程度で感応するので、12月~2月の播種では注意が必要である。とう立ちする前に必ず収穫する。

<品種の特性>
 「早生千筋京水菜」(丸種育成)は、ハウス周年栽培用に開発された極早生用の品種で、約30日程度で収穫できることから、年に4~5作の周年栽培が可能である。鮮緑色の細葉で葉の縁に多数の欠刻があり、葉軸は白くて極細く、株張りとう揃いが良い小株取りの品種である。

<施肥の方法>
 <3間ハウスの場合の一例>
 外側の条数を少なめにする。排水が悪い場合はベッドを高くする。播種前に床はレーキ等で平らにする。
【は種前の準備】
 PH、ECをチェックする。ダイアジノン粒剤またはスタークル粒剤を散布し、土壌混和する。耕うん前にかん水し、ある程度乾いてから再度耕うんし、畝立を行なう。その後十分にかん水する。

間口	外ベット	外条数	内ベット	内条数	条総数	シーダ長	本数
3間	90cm	6条×2	115cm	7条×2	26条	1,530m	21,857
3間半	90cm	6条×2	160cm	10条×2	32条	1,600m	22,857
4間	120cm	8条×2	175cm	11条×2	38条	1,672m	23,885

100坪当たり成長8割、正品8割とすると坪1箱を目標とする。
 外側の条数を少なめにする。排水が悪い場合はベットを高くし播種前に床はレーキなどで平らにしておく。
 冬場はサイド側とベッドの隙間を50cm位取り条数を減らす。

【は種作業】
 シーダーテープ使用の場合シーダーテープ用は種機で行なう。は種後は、発芽が一斉に揃うよう十分にかん水する。(かん水が不十分だとテープが溶けず、発芽しない。)シーダーは種機がない場合、6列の溝が作れる道具を作成しておくとうよい。できた溝に合わせてシーダーテープを張り、ちん圧する。

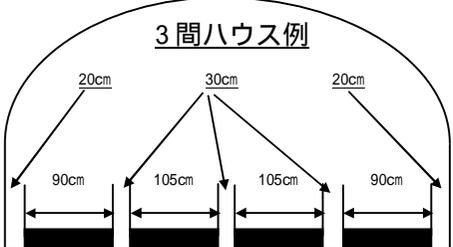
【かん水管理】
 かん水チューブ(スミサンスイM・Rなど)を使用することで、土の跳ね返りを少なくし、汚れにくくなり、病害予防にもなる。発芽後、地表が乾いていたらその都度かん水を行なう。(土畑では余り乾燥しない) 本葉1~2葉まではかん水を控え、立ち枯れ病や徒長を予防する。多かん水は、根をいため病気や徒長の原因となるので、控える。収穫時に水分が少なすぎると棚持ちが悪くなり、多すぎると収穫時や輸送時に葉折れの原因にもなり、腐敗(とろけ)クレームに直結するので、やや水不足気味で収穫期を迎えられるようにするのが灌水のポイントです。収穫予定の10日前にはかん水を控えて(土畑では水切りをする)色上がりを良くし、収穫時の葉折れやトロケを防止する。

【収穫・調整】
 草丈27~32cm、1株40g程度(M規格です)を目標に収穫する。根を切って土を払い、黄色くなった下葉や子葉、虫食い葉、枯れ葉などを除去し、重さを計り階級毎に選別する。階級別に計りで計測し、210g皆がけで袋詰めする。
 収穫後は、急速に品質が低下しやすいので調整・袋詰めはすみやかに行なう。
 水洗いは腐敗など品質低下の原因となるため絶対に行わない。規格毎に、20袋入れを1箱とする。

【病害虫予防】
 耕種的防除として
 1. ハウスで雨を防ぎ病気の発生を少なくする(土畑では明きよ等で排水対策)
 2. ハウスの開口部にも必ず防虫ネットを張り、虫の侵入を防ぐ。
 3. 未熟堆肥は施用しない。
 4. ハウス内は常にきれいにすることを心がけ、雑草などを防ぎ、繁茂を防ぐ。

【栽培のポイント】
 <夏場の管理> 生育後半にハウス屋根に遮光ネット(シムラ等)をかけて、できるだけ涼しく管理する。(目安：7月~8月期、40~50%程度の遮光)(サイドは夜間も基本的に開放)収穫・調整・出荷作業に労力がかかり、かつ春夏期は草丈の伸びが早いので収穫がおくれないう、計画的には種して、収穫のピークをなだらかに連続して出荷できるようにする。高温期の収穫はしおれやすく鮮度が低下しやすいので、涼しい早朝になるべく収穫する。調整労力(袋詰め)はふつうの人で1人で1日10箱程度が目安であり、1作の収穫始めと収穫終わりの期間が3日程度(夏場は短い)であれば、1回の播種面積は労力1人につき30坪程度となり、その点を考慮し順次段蒔きするように計画は種を心がける。

<冬場の管理> 発芽しやすいように、暖かい時期を選んで種します。発芽後、5 以下の温度で15~20日目で花芽分化するので、12月~2月のは種は、ベタガケ、ビニールなどで保温に努める。(発芽が揃ったら、ベタガケは外す) 収穫期が1~2月の場合は、3月収穫の場合は花芽分化の危険もあるので、計画的な収穫に努める。(天候を予測して、暖かい日が続いたら早めの収穫も考える)たまに晴れた場合には、換気をしてハウス内湿度を抜き、灌水も行なう。



栽培上のポイント